

「短歌研究新人賞」の歌 屋良健一郎

「短歌研究」九月号に、第五十六回「短歌研究新人賞」の受賞作と上位作品が掲載されている。受賞作は山木礼子「目覚めればあしたは」。「未来」所属の二十五歳。博物館でのデートをテーマにした連作で、前面に出ているのは展示品の持つ時間と作者の生きる時間との交錯である。「遙かな過去の時間や空間と、今を生きている現実」とを「行ったり来たりする感じ」という選考委員の栗木京子の評がこの作品の魅力をまどめて感じていると感じた。

・四大文明いづれも河に生れしこと 冷水器のペダルをゆるく踏む

四大文明の誕生というはるか昔の出来事と、作者の生きる現代が冷水器から静かに出ている水によってつながれる。水を豊かに持つ者、水を制する者が歴史を主導してきたという真理をさりげなく提示しており、印象的だ。

・地球へと祈るかたちにひざまづきひとは月にも石を拾ひつ
太古より、人類は石を加工して道具とし、また信仰の対象ともしてきた。月で石を採取するのは科学的な関心からであって、それとは異なるが、しかし、石を拾うという行為にやはりなにか人間の本質のようなものを感じる。月に降り立つという現代的な場面と、地球での人類の歴史の始まりとをオーバーラップさせる一首。水を欲するという行為を切り取った前の歌と同様、この作者

なりの視点で歴史、文化の根源というものに迫っている。

・のちの野に放たれるまでまだここに暗くとどまるわれの遺伝子
目覚めればきみのあしたはけふの日の遺跡のなかではじまるだらう

・またひとり届けてエスカレーターはゆるやかに地へ吸はれゆきたり

・てのひらの記憶をしんと眠らせて土器は土へとかへらずにある
子孫へと継承され、悠久な時間を生きる遺伝子を詠む一首目、今日生きている場所も明日には少し何かが変わっていて、今日と全く同じではありえない、それは遺跡であるという二首目。時間が流れ、歴史が上書きされていくことを大らかに詠んでいて魅力的だ。三首目は、そのような時間の流れをエスカレーターという身近なもので視覚的に表現している。土器が土に還らないのは人の温もりに触れたからだ、という四首目は、やはり大きな時間の流れを詠いつつも、他の歌と比べて情緒的などころが良い。

次席、みかみ凛「きつね森」も読ませる連作だと感じた。都会から来たらしい作者が、村の生活を詠む。

・村役場の薄墨色のテーブルにマリオなら踏むキノコが盛られ
・やせぎすの新聞記者がやつてきて癒しといふ語を村へあてがふ
一首目、テレビゲーム「スーパーマリオブラザーズ」で、主人公のマリオは、キノコ型の敵を踏んで倒す。二首目の「やせぎす」もそうだが、戲画的な描写が特徴的な連作である。

選考座談会でのやり取りは、表現の完成度か、連作の主題か、今後の可能性か、といった基準で選考委員の評価が分かれる場面もあり、新人賞とは何かを問いかけていて興味深い。